

孝明新政府における新選組の位置

後 藤 致 人

はじめに

新選組は、近年ようやく歴史学の研究対象として取り上げられるようになってきた。松浦玲氏^①は、新選組に関する史料を正面から分析して、主に近藤勇らの思想を考察している。宮地正人氏^②は、新選組に関する史料を精査し、その上で幕末期のダイナミック構造の中に新選組を位置づけようとする。家近良樹氏^③は、いわゆる「一会桑」政権の展開のなかに新選組を組み込もうとしている。ただ、研究は二十一世紀になってようやく本格化したところであり、幕末維新期の政治構造や思想体系のなかに、まだ新選組が位置づけられたとまでは言えず、今後の課題として残されている。

一九七〇年代ころまで、幕末維新期政治史研究は、明治政府に連なる系譜を説明するために、薩長を中心とする倒幕派の発展過程を中心に行われてきた。そのため、新選組は明治政府に連なる勢力からは敵対勢力として描かれる傾向にあり、幕末維新期政治史研究のなかで積極的に評価されにくい状況にあった。

一九七〇年代以降、各地の自治体史編纂事業が活発になったこともあり、幕末維新期の各藩の政治動向が実証的に明らかになっていった。また倒幕派中心の偏った研究に対する反省もあって、外国奉行経験者を中心とする幕府革新官僚、京都守護職の会津藩、奥羽越列藩同盟^④など、一九七〇年代以前の研究では、封建勢力として切り捨てられてきたものも議論されるようになった。しかし、前述したように新選組が歴史学の俎上にあがってきたのは二十一世紀になってからであり、それまでは新人物往来社を拠点として菊地明氏、釣洋一氏、山村竜也氏、伊東成郎氏らが新選組関係の史料を精力的に発掘し、新選組ファンの興味を満たしてきた。

一方で新選組は、歴史学会の動向とは対照的に、小説・演劇・映画などで頻繁に取り上げられてきた。昭和初期の下母沢寛『新選組始末記』^⑤によって、新選組は一般的に有名になるが、この小説の発表時期は、大衆小説や映画の勃興期にあたる。新選組は、幕末期の主要な事件に関わっており、事件や登場人物が多彩で、ドラマになりやすい。こうして立場の異なる坂本竜馬と並んで、今日まで多くのファンを獲得してきた。

ただ、坂本竜馬のファンと新選組のファンでは、共感している部分に違いがあるのではないかと思われる。坂本竜馬ファンは、その破天荒でスケールの大きい人物像に引き付けられる一方、その国際感覚や近代日本の青写真を描いた先見性に注目していることが多い。これに対して新選組のファンは、近藤勇・土方歳三・沖田総司・斉藤一など、隊士一人ひとりに思いをよせ、滅びゆく幕府とともに運命をともした姿に、共感を抱いている。坂本竜馬ファンは、どこかで日本の未来を見ているの

に対して、新選組のファンは死を見つめ、明治以降の日本を切り離している。

だが新選組は、近代日本と無関係な存在だったのだろうか。長州藩から見れば、新選組は近代化を阻害する「人斬り集団」、「幕府の犬」なのだろう。ただその長州藩も幕末の段階では「朝敵」であって、長州藩のみが近代化を目指していたわけではなく、長州藩の視点のみで新選組を評価する必要はない。

新選組は一八六九年（明治二）の箱館戦争で土方歳三が戦死して壊滅しているのに、明治日本とは無関係に思われがちだが、坂本竜馬も王政復古クーデターの前に暗殺されているのである。幕末の長州藩を指導した高杉晋作も明治維新を見ずに死んでいる。しかし、明治を見なかったからといって、坂本竜馬や高杉晋作を明治日本と無関係であると評価する人はいない。

私は、近代天皇制国家成立史の中に新選組を位置づけようと考えている。新選組は天皇との関係が密接で、とても「幕府の犬」には思えない。佐幕派の新選組が、尊王攘夷運動の中心である長州藩系志士を取り締まったという理解はわかりやすいのだが、実は新選組局長近藤勇の思想は、尊王攘夷であった。尊王攘夷思想の新選組が、尊王攘夷運動を取り締まっているのである。わかりにくい話なのだが、尊王攘夷と佐幕派を対抗関係に理解しているから、混乱するのではないか。尊王攘夷であり、かつ佐幕派であるという勢力も存在するのである。

私はここまで孝明新政府という概念を提唱してきたが、新選組は、孝明新政府を構成する重要な治安組織の一部であると考えている。また、孝明新政府と新選組の成立と崩壊を並べてみると、驚くほど軌を一にし

ていることがわかる。

本稿では、新選組の歴史を孝明新政府の成立と崩壊に重ね合わせることによって、新選組の近代天皇制成立史における位置づけを考察してみたい。

第一章 孝明新政府の成立と崩壊

私は、日本における国民国家形成の過程を考えるために、天皇権威の上昇を背景に、いつ天皇が権力の中枢に位置づけられたかを考察してきた。⁽⁸⁾ 国策の最終的決定はどこで行われてきたか、決定文書は何かという観点から中央権力の推移をみたとき、大政の決定・執行がともに江戸幕府内部で行われていた構造が、攘夷運動が高まる一八六二年を画期に変わっている。幕府による安政の大獄の失敗、和宮降嫁問題で朝廷と幕府の立場が逆転すると、勅使関東下向を契機に、攘夷実行のための雄藩主導の幕政改革が行われ、京都においても將軍・諸大名が上洛し、制度や人事が一新され、朝廷を頂点とする攘夷実行のための新体制が形作られる。勅令も幕令との関係がいまいではあったが、諸大名に頻繁に伝達されるようになった。

一八六三年八・一八政変で長州藩がこの新体制から追放されると、朝廷を頂点とする大政の決定・執行のシステムが整備される。すなわち、朝廷における雄藩を交えた朝議が大政を決定し、幕府はそれを執行する機関として位置づけ直された。幕府への大政委任、十五代將軍の任命も大政の決定が朝廷における雄藩を交えての朝議にあることを前提に行われたものであった。また一橋慶喜・松平容保は、朝議においてその大政

の決定に参与し、影響力をもった。

一八六二・三年以降、さまざまな政治勢力の権力闘争の結果、孝明天皇や朝廷の主体性が現実的に損なわれることが多かったにしても、国家機構の再編という視点からみると、孝明天皇・朝廷は権力の中心へと位置づけられている。「天皇」権威に権力の正当性が認められ、なおかつ権力構造の面でも大政の決定機関として孝明天皇・朝廷が中心に位置づけられているとなると、「明治政府」のように天皇名を政府名称につけた方が、近世的イメージを払拭する上でも、日本型近代国家の特徴を把握する上でも適当なのではないか。そこで私は、江戸に大政の決定・執行のあった江戸時代の体制と明確に区別するために、この時期の政府形態として孝明新政府という名称を提起した。

その上で、戊辰戦争の基本的性格を明治新政府対旧江戸幕府の戦いではなく、二つの近代化勢力である明治新政府対旧孝明政府の戦いと規定した。その方が、徳川慶喜が蟄居謹慎し、江戸城が開城した後も戦争が続き、なぜ会津戦争が最大の決戦になったのかについて、説明がつきやすいからである。

つまり、一八六六年孝明天皇が死去し、幼い明治天皇が位につくと、長州系の公家が朝廷に再び進出、孝明政府を構成していた徳川慶喜・会津松平容保らは天皇の掌握が困難となる。これにかわって、孝明政府の朝敵であった長州藩と途中で孝明政府から離脱し、長州藩と同盟を結んだ薩摩藩は、明治天皇の掌握に成功、権力の正当性の関係は逆転し、明治新政府樹立へとつながる。明治新政府は、徳川幕府を朝敵としていたというよりは、旧孝明政府首脳を敵視していたため、江戸城開城後も戦争は続き、会津戦争が戊辰戦争最大の戦いとなったのである。

孝明新政府における新選組の位置（後藤）

それでは、この孝明新政府概念のなかに、新選組はどのように位置づけられるのだろうか。

第二章 新選組の誕生と孝明天皇

一、勅使関東下向と浪士隊の結成

一八六二年（文久二）薩摩藩兵一千名とともに勅使大原重徳が関東に下向し、幕府に対して攘夷決行のため將軍・諸大名は京都に上洛し、一橋慶喜を將軍後見職、越前松平慶永を政事総裁職にするという幕政改革を要求した。公武合体を進めた老中安藤信正が坂下門外の変で失脚し、幕閣が動揺していた時に重なったこともあり、幕府はこの要求を受け入れ、十四代將軍家茂は翌年上洛することになった。

新選組の母体となる浪士隊は、このとき將軍上洛警備の別働隊として江戸で組織されている。武蔵国多摩地方で天然理心流の剣術道場試衛館を開いていた近藤勇、門人の土方歳三、沖田総司や水戸浪士系といわれる芹沢鴨ら約二百名が応募し、上洛している。浪士隊の大部分は江戸に帰還するが、尊王攘夷の志を持つ近藤勇・土方歳三・沖田総司ら試衛館グループと芹沢鴨ら水戸浪士系グループ約二十名は京都残留を希望し、文久の幕政改革の一環として設置された京都守護職の会津藩預かりとなった。

この段階ではまだ「新選組」という隊名を名のつてはいなかったが、江戸から京都に事実上の首都機能が移るそのときに、新選組の母体も出発していることは興味深い。剣術道場の主宰者が、門人を引きつれて將軍警備の浪士隊に応募するだけでなく、主力の浪士隊が江戸に帰還して

もなお、京都に留まったことからみて、ある決意があつてのことだろうと思われる。

この決意とは、江戸幕府を支えようというのではなく、尊王攘夷の一翼を担おうというものであった。近藤勇は、一八六三年（文久三）十月に会津藩の公用衆に出した書簡の中で、「全体私共儀は尽忠報国志士、依而今般御召相応し、去二月中遙々上京仕、皇命尊戴、夷狄攘斥之御英断承知仕度存志にて滞京罷存候」とあり、自分たちは「尽忠報国志士」であり、「皇命尊戴」つまり天皇の命令を尊重し、「夷狄攘斥之御英断」と攘夷の英断を承知し、京都に残留することを決意したことを記している⁽⁹⁾。攘夷のための新体制が京都に成立し、近藤勇らはそのことに感じ入ったのである。近藤勇の手紙の書き方から察すると、江戸で浪士隊に応募したときでなく、上洛中にその意味を理解したようである。將軍・諸大名は、孝明天皇に改めて忠誠を誓い、朝幕関係が次々と朝廷上位に改められ、その変化の様は劇的であつたと思われる。近藤勇らも在京中にその変化を目の当たりにし、新時代を担おうと考えたのではないか。

二、八・一八政変と新選組の誕生

「新選組」の誕生には、朝廷が深く関わっている。

一八六三年（文久三）八・一八政変は、孝明新政府の成立と展開を考える上で大きな転機であった。將軍・諸大名が上洛した京都では、勅使関東下向を進めた薩摩藩ではなく、急進的な攘夷論で中下級公家の支持を得ていた長州藩が主導権を握っていた。しかし、下関砲撃の失敗など急進的攘夷の行き詰まりが明らかとなるなか、薩摩藩と京都守護職の会

津藩が提携し、中川宮を通じて孝明天皇の意志を確認した上で、京都より長州藩と三条実美ら七卿を追放した。会津藩預かりの浪士隊も出勤し、その働きは会津藩を越えて、朝廷の目にもとまったようである。

新選組古参隊士の日記である「島田魁日記」には、八・一八政変のおり、「南門」を守ったとき、「其節転奏ヨリ新選組ノ隊名ヲ下サル」と、朝廷の武家伝奏から新選組の隊名をもらつたことがわかる。また、十月二十日の近藤勇発の書簡には、「去月二十五日、皇庭より御固御褒置候而、天子金壹円宛、一統へ拝領被仰付候」とあり、八・一八政変出勤の恩賞が、朝廷からも出ている⁽¹⁰⁾。

新選組を佐幕派とだけ決め付けると、この朝廷側の動向は不可解に写る。尊王攘夷運動の敵であるはずの新選組が、朝廷から恩賞をもらっているからである。ただ尊王は、長州藩の専売特許ではなく、將軍・諸大名が上洛し、安政の大獄の失政を謝罪した上で孝明天皇に忠誠を誓って以降、尊王は幕府やいわゆる佐幕派も含め否定できない、すべての前提となつていた。朝廷を舞台として長州藩と薩摩藩・会津藩が権力闘争を繰り広げ、薩摩藩・会津藩側が孝明天皇の身柄を押さえた上で勝利し、そのとき会津藩とともに朝廷警備に出勤した浪士隊に対して、朝廷から恩賞が出て何ら不思議はない。近藤勇は、尊王攘夷に共感して滞京を決意していたわけで、この朝廷の意向を有難く受け取つたと推察でき

る。これ以降、近藤勇らは、「新選組」を名のようになる。ただ、一方で「松平肥後守（会津松平容保）御預り」という認識もある⁽¹¹⁾。京都守護職が一時越前藩の松平慶永に代わつたとき、新選組は「松平慶永御預り」になることを拒否し、「松平肥後守御預り」へのこだわりをみせて

いる。越前藩に対する不信感もあったのかもしれないが、上洛し滞京を
決意して以降、会津藩が身元引受人になり、そこで醸成された信頼関係
が新選組の基盤となっていた。

新選組は、八・一八政変直後から京都市中見廻りを開始している。そ
れは、京都町奉行からの町触で確認できる。現在の京都市下京区で庄屋
などを歴任した農民の日記である『若山要助日記』に、九月八日付で
「御触到来、左之通、松平肥後守殿御預浪士、市中昼夜見廻り候様、肥
後守殿より被仰付候条、為心得持場限相達置候様可致事、亥八月」と
ある。⁽¹²⁾新選組という名称が使われておらず、到来日は「九月八日」だ
が、町触の中に「八月」とあることから、八・一八政変直後、会津藩か
ら市中見廻りを命ぜられ、すぐに京都町奉行を通じて京都の町衆に伝え
られたと考えられる。ここから、新選組の警備活動が八・一八政変後、
公的となったことがうかがえる。そして言い方を換えれば、長州藩を追
放して、会津藩・薩摩藩主導で孝明新政府が再編されるなかで、新選組
がこの体制に組み込まれたのである。

新選組の警備活動が公的になった九月、素行に問題のあった水戸浪士
系の芹沢鴨らが肅清される。これは、近藤勇らの独断というよりは、市
中見廻りを命じた会津藩の意向が働いたと考えるべきであろう。こうし
て試衛館グループが実権を握り、局長近藤勇―副長土方歳三の体制が確
立したのである。

第三章 孝明新政府における新選組の位置

一、参与会議崩壊と新選組の位置づけの変化

八・一八政変は、朝廷を舞台に、薩摩藩と会津藩が主導して起こした
クーデターであり、幕府に絶対的権力が戻ったわけではなかった。この
結果朝廷に参与会議が設置され、薩摩藩・会津藩など雄藩が大政に参与
し、朝廷のもと薩摩藩主導の雄藩による連合政権が成立するかに見え
た。薩摩藩は、政局の主導権を握るため、短期間に勅使関東下向と八・
一八政変と二度も藩の命運を賭けた行動をとっていた。しかし、鳥津久
光は藩主ではなく、朝廷での官位もなかったため、朝廷を舞台とする言
論政治に不向きであった。雄藩会議が混迷をみせるなか、台頭するのは
言論に自信を持つ一橋慶喜であった。一橋慶喜は、將軍後見職を辞任
後、朝廷の役職である禁裏守衛総督となり、参与会議にも参加してい
た。

参与会議は、雄藩同士の対立から半年も経たずに崩壊し、一八六四年
(元治元)幕府に大政委任が行われる。ただ以前の朝幕関係に戻ったわ
けではなく、朝廷の優位性を前提として、四つの政策条件(横浜鎖港、
海岸防衛、長州藩の処置、物価安定)がつけられた上での委任であり、
「国家之大政大議ハ可遂奏聞事」という但し書きまでつけられていた。

さて、幕府に大政委任した後、京都では一橋慶喜・会津松平容保・桑
名松平定敬のいわゆる「一会桑」が台頭する。この「一会桑」に共通す
るもの、それは京都における軍事・警察組織ということである。一橋慶
喜は、朝廷の役職である禁裏守衛総督、つまり朝廷防衛長官に就任して

いる。会津松平容保は文久の幕政改革で設置された京都守護職になっており、桑名松平定敬は京都所司代に就任していた。「一会桑」は、京都の治安維持に責任を持っていたのである。

もともと、京都守護職と京都所司代は幕府の役職であり、朝廷と対立してもおかしくはない。ところが松平容保の実直な性格からか、容保は孝明天皇の信任が厚く、それは天皇の手紙である「宸翰」が容保宛に多く残されていることからうかがえる。後の会津戦争で、会津藩は徳川の恩顧とともに、この孝明天皇の信任を盾に朝敵でないことを主張した。会津藩の立場からみれば、朝敵は長州藩なのであり、幕府の役職である京都守護職であつても天皇の信任があつたという意識が強いのである。京都所司代は、もともと朝廷監視を任務とする役職であつたが、京都所司代も文久以降その機能に変化があつた。また松平容保と松平定敬は実の兄弟であり、人格的結びつきがあり、京都所司代となつた松平定敬も朝廷と対立する意志はなかつた。

「一会桑」の役割として、京都の治安警備以外でもう一つ重要なものがある。それは在京の雄藩として朝廷の議論に参加することである。会津松平容保が孝明天皇の信任が厚かつたことは既に述べたが、一橋慶喜も朝廷に影響力を持っていた。彼らを単なる警察機構と位置づけるとその機能の一面しか見ないことになる。

さて、新選組は八・一八政変後、京都守護職の会津藩の命令で京都市中見廻りを命じられ、この京都近辺の軍事警察機構の一環に組み込まれた。参与会議崩壊後も新選組は公的に市中警備を行っている。

一八六四年四月に一橋慶喜禁裏守衛総督が朝廷に提出した武家上申書が残されている。

(史料)「山階宮国事文書写」

(一八六四年(元治元) 四月十九日一橋慶喜禁裏守衛総督より到来か)

武家上申書

一守護職二組

一所司代一組

右何レモ一組之人数凡三十人宛

一新撰組一組

但是ハ只今迄モ始終見廻リ居候得共猶亦改テ相違積

右ハ追テ永久之御警衛向相立候迄当分之内洛中夜廻リ相達尤見廻

リ場所案内之タメ町奉行両組三人ツ、差添候様可相達候事

総督附属八百人

一橋人数四組

壹組二十五人鎗劍隊之者計但従者有之候間猶取調之上可申上

候事

右昼夜回リ之儀ハ御築地内外并市中寺院等敵重可為相廻事(後略)

ここから、参与会議崩壊後、一橋禁裏守衛総督配下の部隊が朝廷の内を外を警備し、京都守護職、京都所司代と新選組が洛中夜廻りを担当していることがわかる。京都には町奉行が存在するが、京都町奉行は、洛中夜廻りのための場所案内の任務が課せられている。

ここで「武家上申書」の書き方に二点注意したいことがある。第一に、新選組が京都守護職・京都所司代・禁裏守衛総督とともに、警備機

関として登場している点である。新選組は一八六四年四月段階で、公的機関として認知されていたことが確認できる。

その上で第二として、京都守護職・京都所司代は併記しているのに対し、新選組は独立して記述があり、そこには今までも見廻りをしていたが、「猶亦改テ相達積」、つまり新選組に、改めて京都市中見廻りを命ずる「つもり」であると書かれている。なぜ改めて命じる必要があるのか、そして命じるのは京都守護職なのか、それとも禁裏守衛総督やあるいは江戸幕府なのか。

八・一八政変以後、京都守護職が新選組に市中見廻りを命じたのは、公的ではあっても過渡期的なものであったと考えられる。これに対し今回の警備計画は、暫定的なものとして書かれているが、京都守護職が主語となつて記述された警備計画ではなく、京都の治安維持に責任を持っていた「一会桑」全体の警備計画である。つまり、京都守護職と新選組の関係を越えた、治安維持に責任を持つことになつた「一会桑」のなかに、改めて新選組が位置づけられたものと理解できるのではないか。

ところで、京都の治安警備に関して、新選組はどこを担当していたのだろうか。禁裏守衛総督が朝廷の内外を警備していたことはわかるが、京都守護職・京都所司代と新選組には警備区分や警備の種類に差があったのだろうか。このことを、孝明新政府期の京都市街における京都御所や二条城、京都所司代それに会津藩の駐屯地や新選組の屯所の位置から考察したい。

京都守護職の会津藩は、はじめ黒谷にあり、ここは中世以来京都近辺で大部隊を駐屯させるには適した場所で、平氏の拠点や鎌倉時代では六波羅探題が置かれていたところである。ところが、その後一八六五年

孝明新政府における新選組の位置（後藤）

（慶応元）九月より、京都御所と幕府機能のあつた二条城の中間にその拠点を移している。京都御所・二条城・京都守護職、それに京都所司代は空間として近接しており、中央官庁街を形成しているのである。これに対して、新選組の屯所は、はじめ壬生というこの中央官庁街からは南に離れたところにあり、その後西本願寺に移るも、ここは中央官庁街からみてさらに南に離れたところであつた。このことは新選組の警備区域や機能と関係があるのではないか。

新選組と名のらず、会津藩預かりのころ、京都御所からも二条城からも外れた壬生に屯所を構えたとしても、それは特に不思議ではない。しかし、新選組が孝明新政府の京都市中見廻りの公的機関として位置づけられて以降も、中央官庁街から離れ、屯所を移すときも、御所や二条城からみてわざわざ南に離れて構えているのである。

つまり、御所や二条城がある場所を中心と考えた場合、禁裏守衛総督がその中心を警備し、京都守護職・京都所司代がその周辺、そして新選組はさらにその周辺というように警備区域が同心円的に広がっていたのではないか。新選組は末端の、ある意味最前線の警備を任されていたのであり、屯所は中心部ではなく周辺部に置かざるを得なかつたのだらう。

ただ、新選組はその最前線の警備の過程で大きな功績をあげるようになる。一八六四年六月池田屋騒動である。八・一八政変以降、孝明新政府から追放された長州藩は、再上洛の機会をうかがっていた。孝明新政府側から見れば、長州藩は最大の警戒対象であり、末端の警察機構に位置づけられた新選組も、長州藩の桂小五郎（木戸孝九）に注目していた。

池田屋騒動で、新選組は桂小五郎を捕縛することには失敗したものの、宮部鼎蔵ら脱藩浪士らを抑え、京都に火を放ち、その混乱に乗じて孝明天皇を奪取するというクーデター計画を察知することに成功した。八・一八政変や王政復古クーデターも天皇の早期掌握に力点が置かれたクーデターであり、どこまで具体性があったかは不明ながらも、決して荒唐無稽のクーデター計画ではなかったと思われる。事実、長州藩は池田屋騒動の報に接すると主力部隊を繰り出しており、このクーデター計画は実現性のあったものと推察できる。

上洛した長州軍は、禁門の変で薩摩藩・会津藩と衝突、敗北するとその責任を取って長州藩の指導者の一人久坂玄瑞は自刃している。この戦いで京都の多くは焼け、京都御所の門の一つ蛤御門にも銃弾の痕が残された。孝明天皇は長州藩の行動に激怒し、翌年第一次長州戦争に発展する。禁門の変によって長州藩は朝敵扱いとなり、そのきっかけを作ったのは新選組であった。京都市中警備としての新選組の評価も、ここに固まったものと思われる。

二、慶応の幕政改革と近藤勇の直参昇格

一八六七年（慶応三）六月、新選組による京都市中取り締まりの功績が認められ、幕臣取立てが決定する。近藤勇は見廻り組与頭格、土方歳三は見廻り組肝煎格、沖田総司は見廻り組格などに、それぞれ任命された。この幕臣取立ても、単なる出世とだけ捉えるのではなく、孝明新政府の構造の中に位置づけたい。

一八六六年十二月に徳川慶喜が十五代将軍に就任し、慶応の幕政改革が進められた。幕閣に総裁制が導入され、複数いた老中を陸軍総裁、海

軍総裁、国内事務総裁、外国事務総裁、会計総裁などと割り振り、その総裁には外国奉行経験者や咸臨丸組・留学経験者など外国事情に詳しい革新的な幕府官僚を充て、陸軍総裁には勝海舟が、海軍副総裁にはオランダ留学から帰国した幕臣の榎本武揚が登用された。

徳川慶喜には天皇權威を前提に、幕府を近代行政機構に再編する目論見があったと考えられるが、京都における治安機関である新選組も、京都守護職会津藩預かりから幕府直轄にすることで、より明確にこの近代行政機構の中に取り込もうとしたのではないか。新選組は、八・一八政変後に公的に京都市中見廻りが認められ、池田屋騒動の功績でその地歩を固め、そして十五代將軍慶喜の慶応の幕政改革の一環として京都の治安機関として近代行政機構の中に位置づけられた。

「二会桑」の役割として、京都の治安警備以外に、在京の雄藩として朝廷の議論に参与していたことをあげ、単なる警察機構と位置づけるとその機能の一面しか見ないことになると指摘したが、新選組についても同様である。近藤勇は、幕府革新官僚との交流が深く、単なる治安組織の長にとどまらない活動があった。たとえば大政奉還の前夜にあたる一八六七年九月、若年寄で徳川慶喜の信任が厚い永井尚志は、土佐藩の後藤象二郎に近藤勇を紹介している¹⁵⁾。また朝廷にあつて孝明新政府を支えた中川宮も、近藤勇を高く評価している。徳川慶喜の側近で、暗殺された原市之進の後任に近藤勇を推そうと、中川宮は会津藩の秋月悌次郎と相談している¹⁶⁾。

新選組が幕臣に取り立てられたといっても、その幕府は、譜代独占の昔ながらの幕府ではなく、朝廷上位を前提とし近代行政機構を目指すものであり、新選組も佐幕派でありかつ勤皇であった。だから、新選組は

天皇權威には従順である。

新選組は基本的に隊士の脱退を認めていない。ところが例外があった、途中から参謀として入隊した勤皇討幕派の伊東甲子太郎は、新選組と路線が違うために分派を指向、そのとき亡くなった孝明天皇の御陵衛士という名目を主張し、わざわざ朝廷の武家伝奏よりその名称を拝命している⁽¹⁷⁾。近藤勇らは、伊東らの動きに不信感を持ち、後になって伊東一派を暗殺するが、この「故孝明天皇御陵衛士」という名目の前に論理的に否定することができず、分派を認めざるを得なかった。近藤勇らは尊王攘夷論者であり、勤皇討幕派の伊東甲子太郎が、江戸で近藤と意気投合し、新選組に入隊したのも、勤皇という重なる部分があったからであろう。

孝明新政府に深く関わっていった新選組は、やがてその体制の崩壊とともに悲劇を歩むことになる。

第四章 戊辰戦争と新選組

なぜ新選組は戊辰戦争で戦わなければならなかったのかという問いは、なぜ戊辰戦争最大の決戦が会津戦争だったのか、という問いと深く関係している。戊辰戦争の基本的性格を明治新政府对旧江戸幕府の戦いと規定した場合⁽¹⁸⁾、新選組は幕臣に取り立てられた結果、佐幕派として戦ったことになるが、旧江戸幕府軍の組織的戦闘が終わる江戸城開城後も、なぜ戦わざるを得なかったのか、説明がつかない。近藤勇は偽名を使って降服し、見破られて現在の千葉県流山で斬首されるが、土方歳三率いる新選組は転戦し、土方は戊辰戦争の最終局面である箱館戦争で戦

孝明新政府における新選組の位置（後藤）

死している。幕臣になって半年しか経っていない新選組が、なぜそこまで幕府に忠誠を誓ったのか。

しかし、戊辰戦争の基本的性格を明治新政府对孝明政府の戦いと規定した場合、新選組の位置づけは変わってくる。長州藩を朝敵とする孝明新政府において新選組は、禁裏守衛総督・京都守護職・京都所司代とともに、京都における治安維持に重要な役割を担っていた。幕臣に取り立てられたのも、朝廷上位を前提として、近代的行政機構に再編されつつあった幕府に公的に位置づけられたからであり、新選組は佐幕派であるとともに尊王であった。

八・一八政変以後の孝明政府の首脳を整理しておきたい。朝廷で実権を握っていた者として、孝明天皇・関白二条斉敬・中川宮、京都在住の雄藩として朝議に影響力をもっていた勢力に、慶喜に代表される徳川家、京都守護職の地位にある会津藩、京都所司代である桑名藩、それに薩摩藩がいる。しかし、慶喜がしだいに朝議の実権を握るようになる、孝明政府内で薩摩藩が孤立し、孝明政府の宿敵であった長州藩と同盟を結ぶことになる。

一八六六年（慶応二）以後は孝明政府が解体されていく過程である。中川宮は一八六六年八月に廷臣列参奏上を受けて引退する。同月慶喜は徳川宗家を継ぎ、十二月には將軍職に就き幕府の実権を握るが、その月に孝明天皇が病死し、孝明政府の中心が失われてしまう。これに代わって長州藩に同情を寄せる公卿が朝廷内部で台頭し、一八六七年（慶応三）十月には「討幕の密勅」が薩摩藩と長州藩に出された。徳川慶喜は、大政の決定機関である朝議での巻き返しに期待をかけて雄藩を朝議に招集し、さらに討幕を避けるために大政の執行機関としての將軍職を

朝廷に返上した。

しかし、薩摩藩・長州藩は、八・一八政変にならって、幼い明治天皇を掌握した上で朝議でクーデターを起こし、王政復古を行った。王政復古クーデターは「自今撰閣幕府等廢絶」という宣言文からもうかがえるように、孝明政府の首脳を構成した関白二条斉敬、前將軍徳川慶喜を追放することが主目的であったと言える。ただこの時点で、大政の決定機関である朝議の大勢が薩摩藩・長州藩主導のクーデターに好意的であったわけではない。一八六八年一月の鳥羽・伏見の戦いで、薩摩・長州藩を中心とする軍隊が、孝明政府を構成していた徳川宗家・会津藩・桑名藩などを軍事的に圧倒したことにより、朝議の大勢が明治天皇を擁した薩摩・長州藩側に傾くことになる。徳川慶喜は、幕府にまだ戦う能力があったことは理解していても、天皇の掌握が困難だと判断すると、蟄居謹慎し、戦線から離脱する。旧来の幕府を支えていた親藩・譜代の多くも明治新政府側につくことになる。

一八六八年四月、陸軍総裁勝海舟の判断もあつて江戸城が無血開城し、徳川宗家は組織的抗戦を中止した。孝明天皇の死去以降、孝明政府の首脳は次々と朝廷より排除されてきた。王政復古クーデターで関白は追放され、江戸城開城で徳川宗家は組織的抗戦を中止する。こうして会津戦争前夜において孝明政府首脳のうち組織的継戦能力をもっていたのは会津藩しかなかった。

会津戦争において、会津藩は徳川家の恩顧とともに故孝明天皇の信任をかかっているように、自己の正当性を孝明天皇に求めている。また長州藩が執拗に会津藩を敵対勢力と目したのは、会津藩が京都守護職の地位にあったときの対立が根底にある。会津藩は、孝明天皇を頂点に朝

廷・幕府・雄藩が国家機関として再編された孝明政府の最後に残された首脳であった。戊辰戦争を江戸幕府の崩壊過程としてではなく、孝明政府の崩壊過程として理解した場合、会津戦争は二つの近代国家建設を目指した孝明政府と明治新政府による事実上の最終決戦として、その死闘を説明づける事ができよう。

新選組は京都の治安維持を司る機関として長州藩の取り締まりに従事しており、また幕臣といえども会津藩への同情が厚く、会津藩と行動をともにしている。長く孝明政府から朝敵扱いをされていた長州藩にとつて、その取り締まり機関であつた京都守護職の会津藩や新選組に対する憎悪は激しく、簡単に許せる相手ではなかった。一方会津藩や新選組にしてみれば、故孝明天皇の信頼が厚かつたのは会津藩であり、朝敵は長州藩ではないか、という思いが強かつた。

そして、土方歳三率いる新選組は、幕末の政局を生き抜いた組織であり、次第にその声望は神格化していった。会津戦争後、榎本武揚率いる旧幕府艦隊と合流し、蝦夷地に渡るとき、松平定敬につき従つた誇り高い桑名藩士は、多くが新選組に入隊している。¹⁹桑名本藩は、養子であつた主君を裏切り、明治新政府側についていたのである。箱館戦争前夜、桑名藩士の名を捨て、新選組に入隊したということは、それだけ新選組のブランドが高まつていた証拠だろうと思われる。

このように、戊辰戦争の基本的性格を明治新政府対孝明政府の戦いと規定した方が、会津戦争が戊辰戦争最大の決戦であつた理由とともに、新選組が戊辰戦争のほぼ全局面で戦つていたことの説明がつきやすい。孝明新政府の治安組織として長州藩と対峙してきた新選組は、王政復古クーデターと鳥羽・伏見の戦いで攻守が逆転し、長州藩が天皇方になつ

たことよって憎悪の対象となった。また一方新選組は幕末の政局に深く関わっていただけに、朝敵は長州藩との思いが深く、その声望も高まっていたため最後まで戦わざるを得なかったのである。

おわりに

最後に、孝明新政府と新選組の成立と崩壊を重ね合わせてまとめている。

孝明新政府は、一八六二年薩摩藩兵一千名を伴った勅使関東下向が契機となり成立する。翌年將軍・諸大名は京都に上洛し、孝明天皇に忠誠を誓い、攘夷決行のための新体制が京都に発足し、また雄藩主導の幕政改革が始まり、一橋慶喜は將軍後見職・越前松平慶永は政事総裁職となった。ただ、京都において実権を握ったのは薩摩藩ではなく急進的な攘夷論を掲げ、公家に人気があった長州藩であった。朝廷が幕府の上位の機関であることが確認されるものの、勅令と幕令の関係が不明確で、勅令・幕令をめぐって各藩の間で混乱が生じた。新選組の母体となる浪士隊は、この一八六三年將軍上洛に際して警護のために江戸で募集されたものであった。上洛後、江戸で剣術道場試衛館を開いていた近藤勇は、尊王攘夷を表明して、水戸浪士系の芹沢鴨らとともに京都に残留、京都守護職として同じ時期に上洛していた会津藩の預かりとなる。

孝明新政府は、一八六三年八・一八政変で大きく変容する。薩摩藩と会津藩が孝明天皇を掌握した上で長州藩や三条実美ら七卿を追放し、その後雄藩主導の参与会議が開かれる。会津藩預かりであった近藤勇らは八・一八政変に宮門警備のために出動、その功績が認められて武家伝奏

から新選組の隊名をもらい、また会津藩から京都市中見廻りを命じられる。新選組が公的に認知されると、素行の悪い芹沢鴨らは肅清され、近藤勇―土方歳三の体制が確立される。

参与会議は半年も経たずに崩壊し、幕府に大政委任が下るものの、朝廷に大政の決定権があるのは変わらず、京都における治安警察権は天皇の信任の厚い「一会桑」が掌握した。新選組は、一八六四年四月に改めて市中見廻りを命ぜられるが、これは京都の治安を司った「一会桑」のなかに新選組が位置づけ直されたことを意味している。

新選組は池田屋騒動で長州藩系による天皇奪取計画を察知し、この池田屋騒動に反発した長州藩は主力部隊を上洛させ、薩摩藩と会津藩は禁門の変でこれを撃退する。禁門の変後長州藩は朝敵となり、第一次長州戦争によって一時弱体化する。孝明新政府は、しだいに雄藩の意向を交えた朝議が大政を決定し、幕府が大政を執行する機関として位置づけ直される。新選組は、孝明新政府に敵対する長州藩系浪士の取り締まりに功績があり、特に池田屋騒動でその市中警備の地位を固めた。

十五代將軍慶喜が進めた慶応の幕政改革では、老中を総裁とし、幕府を近代行政機構へ再編することを目指し、総裁に勝海舟・大久保一翁など外国奉行経験者や咸臨丸組に代表される外国事情に詳しい革新官僚を積極的に登用した。この慶応の幕政改革の一環で近藤勇らは幕府直参に昇格する。こうして新選組は、近代行政機構に再編された幕府に組み込まれた。近藤勇は永井尚志ら幕府革新官僚との交流が深く、孝明新政府を支えていた中川宮の信任も得ていた。

一八六六年十二月孝明天皇が死去、幼い明治天皇が践祚すると、徳川慶喜らはしだいに天皇の掌握が困難となり、孝明政府と敵対していた長

州系の公家が台頭するようになる。一八六七年十二月の王政復古クーデターでは、孝明政府と対立していた長州藩と薩摩藩が明治天皇を掌握した上で、徳川慶喜や会津松平容保ら旧孝明政府首脳を追放する。鳥羽・伏見の戦いで薩長を中心とする明治新政府軍が勝利すると、天皇の掌握が困難と判断した徳川慶喜は蟄居謹慎し、勝海舟は江戸城開城を決意する。また旧来幕府を支持していた親藩・譜代大名の多くも明治新政府側についた。

しかし、孝明政府を支えた会津藩や榎本武揚ら幕府革新官僚の一部は、明治新政府と戦い、長州藩は幕末の政局のいきさつから会津藩を憎悪していたこともあり、会津戦争が戊辰戦争最大の決戦となった。土方歳三率いる新選組は、会津藩や幕府革新官僚とともに戊辰戦争を最後まで戦い、新選組はしだいに神格化されていったのである。

註

- (1) 松浦玲『新選組』(岩波新書、二〇〇三)。
- (2) 宮地正人『歴史のなかの新選組』(岩波書店、二〇〇四)。
- (3) 家近良樹「一・会・桑政権と新選組」『歴史読本』二〇〇〇年十二月号、『孝明天皇と一・会・桑』(文春新書、二〇〇二)。
- (4) 佐々木克『戊辰戦争』(中央公論社、一九七七)、大久保利謙『明治維新の政治過程』(吉川弘文館、一九八六)、家近良樹『幕末政治と倒幕運動』(吉川弘文館、一九九五)など。
- (5) 菊地明・伊東成郎編『新選組日誌』上下(新人物往来社、一九九五)、菊地明編『土方歳三、沖田総司全書簡集』(新人物往来社、一九九五)など。
- (6) 子母沢寛『新選組始末記』(万里閣書房、一九二八)。
- (7) 拙著『昭和天皇と近現代日本』(吉川弘文館、二〇〇三)。
- (8) 拙稿「孝明新政府論」(愛知学院大学『文学部紀要』第四一号、二〇一

- (9) 文久三年十月十五日付近藤勇発松平肥後守御公用衆中宛書簡。
- (10) 文久三年十月二十日付近藤勇発書簡。
- (11) たとえば、文久三年十一月付土方歳三発小島鹿之助宛書簡では、「新撰組」と自称しながら、末尾には「松平肥後守御預り 土方歳三」と書かれている。
- (12) 京都市歴史資料館編『若山要助日記』(一九九八)。
- (13) それは、宮内省先帝御事蹟取調掛編『孝明天皇紀』(吉川弘文館、一九六七)に多く収録されている。
- (14) 前掲『孝明天皇紀』第五卷所収。
- (15) 武市瑞山会編纂『維新土佐勤王史』(富山房インターナショナル、二〇一二) 慶応三年九月二十日条。
- (16) 『朝彦親王日記』(日本史籍協会叢書 七一八 東京大学出版会、一九六九) 慶応三年九月十三日条。
- (17) 篠原泰之進『秦林親日記』慶応三年三月十日。
- (18) 一九六〇年代における「原口清・石井孝論争」で原口清氏は、戊辰戦争の基本的性格を列藩同盟権力と絶対主義権力との闘争と捉え、討幕派によって生み出された天皇制政権の絶対主義的性格を強調し、戊辰戦争を絶対主義の確立過程として捉える。一方石井孝氏は、戊辰戦争の基本的性格としては、絶対主義への道を歩む二つの陣営の戦争であったとする服部之総の論を継承する。しかし、戊辰戦争の本格的段階は江戸開城で終結し、奥羽越前同盟は何ら絶対主義へのコースをたどるものでない、本来の意味の封建領主勢力であったとして、複合的性格にも着目して戊辰戦争像を展開している。
- (19) 郡義武『桑名藩戊辰戦記』(新人物往来社、一九九六)、桑名市博物館、没後百年記念特別企画展「京都所司代 松平定敬〜幕末の桑名藩〜」(二〇〇八)。